

# 「みち」

令和3年12月22日 発行

## 絶対大丈夫！

### 『絶対大丈夫！』

今年のプロ野球日本一となったヤクルトスワローズの高津臣吾監督の言葉である。ヤクルトは2年連続最下位。そんなチームが日本一になるには何があったのか。ヤクルト側の観客席に見える応援タオルの「絶対大丈夫！」の文字。高津監督は、各選手の状態をつぶさにみていたという。そんなこともあり、9月上旬からことあるごとに選手に「みんな自信をもって頑張りなさい。絶対大丈夫。絶対いけるから。絶対大丈夫。」と2年連続最下位の選手たちの潜在能力をポジティブに変化させていったという。(ヤフーニュースより)

我々教職員も児童生徒という選手を『社会』というグラウンドに送り出さなければならない。子どもたちを信じ、一人一人がそれぞれの場所で花開かせてほしい。そのためには、子どもの状態を知り、育てなければならない。そして、機が熟した子どもたちの背中を押し、「絶対大丈夫！」と背中を押し、社会に送り出せるようになりたいものだ。

### 小・中・義務教育学校の「指導訪問」を終了して！



訪問校に到着後、いつも感じるがあります。校舎に入ってすぐに(いや、入る前から)、私たちを迎えてくれるのは、校舎内外の隅々まで行き届いた清潔で整理された教育環境です。花壇に花が咲き、昇降口の靴箱の靴が整然と並び、汚れやすい水場ですらきれいに整えられています。そして、相手の目を見て清々しく「あいさつ」をする子どもたち。(ああ、先生方は子どもたちを思い、子どもたちはそれに応えようとしている学校なんだなあ)と感心させられたり、うれしくなったりしながら、私たちがぴんと背筋を伸ばすのです。

7月1日の長沼東小学校を皮切りにスタートした指導訪問は、新型コロナウイルス感染症の影響により、実施方法の変更を余儀なくされた学校があったものの、12月1日の岩瀬中学校を最後に予定した13校を終えることができました。



校長先生方からは、学校の抱える様々な課題を解決するための具体的な取り組みや、安全・安心な教育環境を整え、特色ある教育活動を展開している様子を説明していただきました。特に、市教育委員会の重点である「授業と授業研究を第一優先にした学校づくり」については、すべての学校においても重点課題として捉え、「探究的で協同的な学び」を実現する授業のあり方を模索していただいていることに感謝申し上げます。

指導訪問で授業を参観するにあたり、私たちが心がけていたことがあります。それは、「授業の評価」ではなく、授業を通して「授業を取り巻く様々なこと」を感じ取り、分科会で先生方とともに考えることです。そこから、すべての子どもが、授業の中で有用感を伴った価値ある一人として認められるよう、「明日からの授業で取り入れてみたい。(試してみたい。)」と先生方が思えることを何よりも大切にしました。

参観させていただいた授業はどれも、子どもたちの良さを引き出し、学ぶ喜びを味わわせたいという先生方の熱意が伝わってきました。一方で、思うように子どもの思考が深まらない、子どもが集中できないという悩みも伝わりました。以下は、ある学級の授業の様子と分科会での先生の会話の一部です。

#### 【子どもたちの様子】

- 授業開始5分。「分かりそうで分からない…。」グループの友達とひそひそと相談が始まる。「そうかなあ。」「こういう考えもあるよね。」「でもさ…。」騒々しさはないが、時間が経つにつれ、子どもたちの集中力が驚くほど高まっていった。



#### 【分科会での先生の話】



- 教科書会社の指導書に頼らず、子どもたちの知的好奇心を刺激する難易度の課題をつくりました。(本時は課題設定に全力投球しました。)さらに、導入を短時間にして、グループでの学び合いに直結。私はできるだけしゃべらずに、子どもたちに時間をたくさんあげました。

表面の事例は、「ペア」または「4人組によるグループ学習」と「ジャンプのある課題」を取り入れた授業でした。聴き合う関係はまだ育成中ですが、先生がよく子どもたちを見ていて、タイミングよく、一人の「気づき」をさりげなく全体に投げかけたり、全体の「戸惑い」を一人のこととして問い返したりするのです。そして、ほめ方がうまい！つくづく「ほめる」ことは、技術ではなく「心の向き方」だと思いました。

最後に、お忙しい中、訪問に際してのご準備と先生方の日々のがんばりに感謝するとともに、今後も子どもの「学びたい」という気持ちを大切に育み、子どもたちが明日の登校を楽しみにする教育活動を展開していただきますようお願いいたします。



### 「交流及び共同学習」について

「交流及び共同学習」という言葉は聞きなれたでしょうか？

先日、N 小学校に訪問させていただいた折の授業の一コマです。

支援学級の児童 A が、通常学級の児童と共に楽しそうに会話し相談している様子を見てとても微笑ましく思えました。A は先生の手を借りずに学習に参加していました。交流学級の児童が「A ちゃん、これ手伝って。」と A が一人でできる活動を子どもたち自らが知っていて、その活動を A にお願いするのです。A はお客様になっていません。A は自らができる力を交流学級の児童と同じ場で発揮しているのです。それぞれが、協力し合って学習を展開していることにとっても感動を受けました。支援学級の児童生徒だからといって常に支援が必要なわけではありません。できるところはどんどん支援を外し、再チャレンジしていけばいいのです。できないところは自分からヘルプサインを出して支援を受けるといいのです。



こんな子どもたちが大人になったときに、どんなに素敵なコミュニティができるのだろうと未来を予想してしまいました。その子のできるところを生かしながら、コミュニティを作り上げればいい。そんな風を感じた授業でした。



◎福島県特別支援教育センター研究発表会では、「交流及び共同学習」についての発表がありました。「主体的学習の準備は必要であるが、同じ学校の子どもであるという意識の醸成が多様な子どもたちが共に学ぶ学校『共に学ぶ環境』を当たり前にし、これからの共生社会の礎となる。」という話を聞き、これがこれからの学校なのだろうと改めて交流及び共同学習の重要性を感じました。

特別支援学級の児童生徒が、特別支援学級に加え、在籍する学校の通常学級の一員としても活動するような取り組みを充実し、～中略～ 教科学習についても、児童生徒の障害の状態等を踏まえ、共同で実施することが可能なものについては年間指導計画等に位置付けて、年間を通じて計画的に実施することが必要である。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）より

コロナ禍の中、対応や対策に追われ心労の尽きない一年でしたが、オリンピック・パラリンピックに感動した夏もありました。冬休みには、二学期の疲れを癒し、希望に満ちた新たな年を迎えられますようご祈念申し上げます。